中大準硬式野球部

平成初の

勝利チームが優勝の

リーグ戦　中大―日大3回戦

中大	**001**	**011**	**020**	**5**
日大	**000**	**010**	**000**	**1**

準硬式野球の東都大学秋季リーグは10月31日、東京・町田市の小野路球場で優勝をかけた中央大学―日本大学3回戦が行われ、中大が5－1で勝って、8シーズン連続、通算57度目のリーグ制覇を果たした。勝又俊主将（文4、掛川西）ら4年生9人は、1年春季から4年秋季までリーグ戦に負けなしで卒業する。8連覇は昭和26（1951）年春から29（1954）年秋以来、チーム2度目。

先発の笠継投手が好投

勝ったチームが優勝となる大一番のコンディションを整えるかのように、球場上空に秋晴れが広がっていた。

三塁側スタンドに中大応援団が陣取り、準硬ファンのOB諸氏も遠くから駆けつけた。相手の日大スタンドを圧倒する応援体制である。

午前9時57分、試合開始。中大は一回、二回と三者凡退。ここまで3三振を喫した。外野までボールが飛ばない。

日大は一回、二回と三塁まで走者

8連覇

大一番で日大を破る

打者12人から5奪三振の見事なピッチングを披露した清水投手

を進め、試合を優位に進める。大一番に懸ける双方の意気込みは、激しい接触プレーとなり、にらみ合うシーンもあった。

三回だった。中大は一死後、8番福澤開捕手（商3、甲府商）が、追い込まれたカウントながらも球速129㎞を左翼へ先制本塁打。青空へ白球が届きそうな、綺麗な放物線を描いた。

「完ぺきでした」

笑顔は一瞬の出来事とし、福沢捕手は顔を引き締めてリードに専念する。「前の晩から、リードをどうするかで頭がいっぱい。バッティングのことは考えていませんでした」

四回の攻撃に入る前、三塁側ベンチ前の円陣で池田浩二監督のカミナリが落ちた。三回までに奪われた5三振のなかに覇気のない打席が見られたからだという。選手の緊張度が増していった。

1点リードの中大は、五回に犠飛で1点。六回にも犠飛で1点を追加した。走者が出ると送りバントを確実に決め、無駄な凡打をさせない采配である。「石橋を叩いて叩いて、さらに叩いてという野球です」と池田監督。

五回裏に1点を失った。二死後、監督はベンチを出てフェンス沿いを静かにブルペンへ。この回から投球準備を始めた清水彰仁投手（商4、甲府商）に打診するためだ。

「次（六回）からいけるか」

「任せてください」

指揮官がブルペンから離れると、清水投手はボールを目の高さに2度、3度と上げて、「緊張しないよう、リラックスするようにしました」。予定より1イニング早い救援に備え、気持ち

中大準硬式野球部 平成初の8連覇

を整理した。登板に備え、ブルペンががぜん活気づいたのはこの後だ。

先発した笠継泰成投手（商4、佐賀商）は粘り強く投げていた。9番打者の代打に中前タイムリーを浴びたとはいえ、クリーンアップと2巡対戦し、3三振、無安打に封じた。「打たれた（適時打）のは追い込んでいて、つい…」。エースナンバー18番を付けた責任感なのだろう、好投も反省の弁が多かった。

五回まで投球数84。一回20球、二回21球…負けられない気持ちが1球1球に神経をすり減らし、疲れが見え始めていた。

五回終了時に場内アナウンスが流れた。「車のキーを拾得しました。お心当たりの方は事務室までおいでください」。観衆は互いに顔を見合わせて苦笑い。張り詰めていた場内が一瞬緩んだ。

パーフェクト・リリーフ

清水投手が三塁側ブルペンを飛び出した。左のグラブの背を右手でポーンと叩いて、いざマウンドへ。

「いつものことです。自分に気合を入れます」

リーグ戦でここまで球速151㎞を記録している。

身構える日大打線。シーズン終了後、ベストナインに選ばれた3番鹿田浩太郎選手（3年、長崎日大）から始まるこの六回を清水投手は三振、三振、一邪飛で終えた。

13球投じて、140㎞超が8球も。日大は速球派のリズムを崩そうと、滑り止めのスプレーを取りに行く、打席になかなか入らないといった作戦に出たが、攻撃の糸口すらつかめない。

左からチアリーディングの本橋さん、島田さん、笠継投手、清水投手、遠藤さん

背番号20はクリーンアップに対した九回も遊飛、右飛。最後となる6番打者に144㎞の速球を外角低めに決めて見逃しの三振。

午後12時43分、中大のリーグ優勝が決まった。

プロ野球楽天のスーパーエース、田中将大投手を思わせるガッツポーズで心意気を表現した清水投手。打者12人に対し、5三振。4イニング、1人のランナーも出さなかった完ぺきリリーフだ。スピードボールがうなりをあげていた。

「狙ったところへ行きました」と白い歯を見せ、「相手が僕のリズムを狂わせようとしていましたが…」打てるものなら打ってみろの気迫、コントロールのよさで、封じ込めた。前夜からの「イメージトレーニングと同じになった」のは他大学がうらやみ、中大準硬が励行する日ごろの鍛錬の賜物だ。

三塁側の中大、一塁側の日大、スタンドとともに明暗がくっきり分かれた。

「日大の選手が言っていた、中大を倒すために一生けん命にやってきた、と。われわれもチーム内で競争し、もっと強いチームにしよう」

試合後のミーティングで、勝又主将の話は喜びよりもさらなる精進を誓うものだった。「先輩たちに続こうとプレッシャーがありました。全日本選手権で負けているので、リーグ戦は負けられない戦いでした」

夏の全日本大学選手権は準決勝

さらなる精進を誓った勝又主将（左）

試合後、池田監督の話に耳を傾ける部員たち

で敗れ、3連覇を逃した。痛恨の1敗を胸に刻み、この日までまっすぐ前を向いてきた。

池田監督は、選手を前にこう話した。

「練習は必ず勝利に結びつく。これは社会に出ても同じです。優勝したのは、陰で支えてくれる人がいたからです。きょうも誰の指示でもなく、トイレを掃除している部員がいた。こういうことを忘れないように」

中大準硬式の強さを見る思いがした。

●

清水投手は11月2日、リーグ戦優勝後に行われた社会人と戦う大会「関東王座決定戦」の開幕戦、三井住友海上火災保険戦で、自己ベストとなる152kmを八王子市営球場のスコアボードに表示した。大会は決勝で明大に勝ち、4大会連続優勝で幕を閉じた。4年生はまたしても負け知らずの優勝だった。

清水投手が152kmを記録したことを伝え聞いた高橋善正・前中大硬式野球部監督は身を乗り出して「そりゃ凄い、プロが注目しますよ」と絶賛した。高橋氏はプロ野球元東映で完全試合を達成し、巨人では長嶋茂雄監督を支えた。投手コーチの経験も豊富なだけに、プロ野球が関心を寄せる清水投手の今後が楽しみだ。

関東王座決定戦　決勝

明大	000	000	020	2
中大	011	013	00×	6

清水投手が記録した球速152kmを掲示する八王子市民球場のスコアボード＝写真提供・中大準硬式野球部

ありがとう応援団

リーグ戦試合後のあいさつで、池田監督から中大応援団に素敵なプレゼントの約束があった。11月末からの豪州遠征で「みなさんにお土産を買ってきます。本城団長、何人いますか? はい、では80人分用意します。応援団とわれわれの絆は将来まで続きます」。勝又主将も「みなさんの応援が僕らの力を引き出してくれました。熱い応援、ありがとうございました」と言って、部員らとともに応援団に一礼した。